

- | No | 問  | 題 |
|----|--|---|
| 1  | 三重県庁は最初は津の大門に置かれたが、一時他所に移され、明治6年に再度津市に移された。一時県庁があったのは今の『伊勢市』である。   |   |
| 2  | 倭姫が天照大神を奉じて伊勢への旅の途中に立ち寄ったとされる場所が「壺志藤方片樋宮」である。比定地とされる神社の境内には「片樋宮」と刻まれた寛保2年(1742)の石標がある。この神社の現在の名は『加良比乃神社』である。 |   |
| 3  | 津藩の生んだ全国的に有名な幕末の漢学者。藩校有造館の第3代督学(学長)を務め、晩年には鳥居町にあった茶磨山荘に隠棲し、天下の文人・墨客と交友したのは『齋藤拙堂』である。                         |   |
| 4  | 津が生んだ不世出のテノール歌手・山路芳久。1988年、38歳の若さで急逝したが、世界の名門歌劇場の専属となり主役を歌った日本人テノール歌手は彼が初めて。その劇場とは『ミラノ・スカラ座』である。             |   |
| 5  | 河内音頭にも謳われる生駒山に、江戸前期、宝山寺を開いた名僧・湛海(たんかい)和尚はJ A津安芸本所西の一色町の出身。小僧時代を送った津市内のお寺は『神宮寺』である。                           |   |
| 6  | 度重なる不幸から立ち直り、香道の復興に一身を献げた女の生涯を描いた小説「伽羅の香」の主人公は美杉町多気の薪炭王の娘。多気や津のまちなに関わる人物や場所がたくさん登場する名作。作者は『宮尾登美子』である。        |   |
| 7  | 雲出小学校は明治6年3月の創立。寺子屋時代から雲出地区の子供たちの教育にあたり実質的な初代校長と今も地区の人々に讃えられる根本貞路は『女性』である。                                   |   |
| 8  | 津駅西口近くに深い森を持ち、白山妙理大権現を祀る真言宗「密蔵院」がある。病氣平癒を喜び、ここを祈祷所とした津藩主は『藤堂高久』である。  |   |
| 9  | 大坂冬の陣のきっかけとなった方広寺の鐘の銘文「国家安康君臣豊楽」を起草した南禅寺長老・清韓の墓碑が、乙部の『上宮寺』にある。   |   |
| 10 | 昭和20年の敗戦時、旧津市の市街地は空襲により7割が焼失し焼野原だった。それでも目覚ましい復興がなされ、最初にバラック小屋の商店が立ち並ぶようになったのは『岩田橋周辺』だった。                     |   |
| 11 | 天正4年(1576)それまで禄高80石に過ぎなかった、20歳の若武者・藤堂高虎を破格の300石で召し抱えた武将は『木下藤吉郎』である。  |   |
| 12 | 津藩は大坂夏の陣で将士71名、歩兵200余名の戦死者を出した。高虎が彼らの供養のため三門を寄進したのは、京都『南禅寺』である。  |   |
| 13 | 津藩校有造館の講堂入り口の朱塗りの門は戦災を免れ、お城公園に移設保存されている。この門は『入徳門』という。  |   |
| 14 | 江戸時代、津の鋳物は名高く、梵鐘・茶の湯釜・燈籠や鉄砲・大砲など名品も多い。参宮客に人気の岩田橋の欄干に付けられた擬宝珠は、『辻氏』の作である。                                     |   |
| 15 | 寛政一揆の際、白山町倭方面から津城下へ向かう一揆衆を久居に入れさせなかったのが、戸木の庄屋『信藤勘太夫』である。   |   |
| 16 | 「和訓栞」の出版は大事業だった。谷川士清の子孫や協力者の努力で、明治20年にようやく完成した。完成までに『110年』かかった。  |   |
| 17 | 士清旧宅は木造瓦葺き、軒高の低い「つし二階造」、連子格子のある町屋風の間取りで、奥座敷の長押の釘隠しに『桔梗』の家紋を使っている。  |   |

- 18 亡くなる前年に築いた反古塚、それは士清が自分の考えが間違っ  
て伝えられないように草稿類を埋めた塚だが、『ほごづか』と読む。
- 19 神宮寺の東側に位置する玉保院納所道場には財界人・川喜田家の墓所もある。その中で陶芸や書画で有名なのは『半泥子』である。
- 20 一身田専修寺の唐門には「十六花卉八重菊花紋」を中心に左右2個の専修寺の寺紋『柳葉菩提樹紋』が飾られている。
- 21 一身田専修寺の本尊は「証拠の如来」と呼ばれている阿弥陀如来立像で『御影堂』にまつられている。
- 22 一身田専修寺の太鼓門は四層の櫓門であるが、これは後年改築されたもの。江戸中期(1760年頃)に建てられた当初は『三層』の櫓門であった。
- 23 真慧上人が一身田に御堂を立て高田派の布教を始めた頃の様子を伝える唯一の記録「川北道場建立縁起」が残る大里川北町のお寺は、『久善寺』である。
- 24 弥次郎兵衛と喜多人の滑稽な道中記で有名な十辺舎一九が文化10年(1813)に出版した伊勢上野・津が描かれている道中案内記は『東海道中膝栗毛』である。
- 25 伊勢上野城主分部光嘉の嫡男の菩提寺であり、また境内の観音堂には馬頭観音が祀られ、初午の厄除けが行われている。この寺は『光勝寺』である。
- 26 河芸町三行地区の西毛谷で合わせ口甕棺が県下で初めて出土したが、これは全国でも数少ない貴重なもので、『平安時代』の棺である。
- 27 江戸時代、河芸町北黒田の浄光寺に生まれた歌人で「獅子巖和歌集」を著し、和歌と念仏の道に精進したといわれる。歌人の名は『涌蓮(ゆれん)』である。
- 28 明治政府の神社合祀令により芸濃町も数多くあった神社が合祀され6社となった。このうち4社が式内社。美濃夜神社、事忌神社、小川内神社と『棕本神社』である。
- 29 芸濃町石山観音公園の聖観音立像は高さ2.52mもある磨崖仏。お顔の風化が進んでいる。この聖観音は奈良の『唐招提寺』の仏像を模写して彫ったとされている。
- 30 芸濃町川原地区にある天台真盛宗の古刹。織田信長の伊勢侵攻に伴う兵火により全焼したが江戸初期に再建された。亀山城主8代石川総紀の山荘書院が移築されているのは『閑翁寺』である。
- 31 芸濃町雲林院の光安寺の本堂は、明治32年の「三重県名所図絵」に、小規模ながら華麗な仏堂で、「世ニ『左甚五郎』ノ作トテ有名ナル堂宇ナリト云」と記されている。
- 32 安濃町の西相野(にしあいの)遺跡では約6000年前と思われる落とし穴・土杭が発見されている。この落とし穴は『敵を防ぐ』ための穴である。
- 33 安濃町草生にある古墳の横穴式石室は、玄室の長さ4.55m、幅1.9m、高さ2.9m、全長9mで安濃川流域では最大である。この古墳とは『大名塚古墳』である。
- 34 安濃町にある草生城は中世の山城で、わずかではあるが土塁・空堀が残っている。城主は草生式部少輔で長野氏の分家である。この草生城は『長谷山』の山麓にある。
- 35 安濃町草生にある菅原道真公を祀る神社は地元の人たちから「草生の天神さん」と呼ばれ親しまれている。この神社とは式内社『比佐豆知神社』のことである。
- 36 長野氏本城から数キロ離れた伊賀街道沿いの小山にも、長野氏の三つの城跡があり、有事の際には本城と狼煙(のろし)で連絡をとった。この三つの城は、東の城、西の城、もう一つは『北の城』である。

- 37 美里町辰水地区に残る家所城跡は、長野氏一族の家所氏の居城として良く保存され、市の史跡に指定されている。城郭、周りの土塁、深い堀切とともに見られるのは、『高い石垣』である。
- 38 美里町家所辰ノ口下集落の高台に地蔵堂があり、中に祀られているのは六面石幢（せきどう）という六角形の石塔に彫られた古い地蔵さん。家所城跡に近いので家所氏との関係が想像できる。この石幢が日本で広く流行したのは『室町時代』である。
- 39 美里町日南田（ひなた）地区のはずれの川には「夫婦淵」がある。この淵に住んでいるという竜神のために大きな自然石に毎年7月7日供え物をしている。この石に彫られているのは『八体地蔵』である。
- 40 美杉町三多気の眞福院の本尊、木造蔵王権現像（津市指定有形文化財、平成3年2月指定）は、極彩色、玉眼嵌入、寄木造で、江戸時代初期の作と言われている。像は『二体』ある。
- 41 昭和24年、青山高原「布引の滝」の滝見台建設工事中に発見された文化財は、経筒と『粘土板に書かれたお経』である。
- 42 白山町川口地区の大角で大量の鍬（やじり）が発見された。材料は奈良県産の『流紋岩』である。
- 43 白山町南家城地区を流れる雲出川から、家城・川口井を拓いたのは『西島八兵衛』である。
- 44 一志町波瀬地区にある山城「波瀬城」は、応永元年（1394）『木造雅俊』が築いたといわれている。
- 45 一志町八太地区には式内「波多神社」があり、この神社の別名を『龍天宮』という。
- 46 戦国時代、一志町八太西出山に八太城を築いたのは伊勢国司北畠氏の侍大将であった『日置大膳亮』である。
- 47 一志町小山地区の青巖寺では、絹本著色仏涅槃図を所蔵している。これは『県文化財』に指定されている。
- 48 久居初代藩主藤堂高通は俳人でもある文人大名で、たくさんの句を残した。高通の俳号は『任口』である。
- 49 国の登録文化財である久居の妙華寺の屋根は、珍しい『鉢形』をしている。
- 50 久居元町の賢明寺にある石板で造られた珍しい五輪塔（県指定文化財）は、『平安時代』に造られたものである。
- 51 大賀蓮、大山蓮華が咲き、熊野観心十界曼荼羅や本尊阿弥陀如来座像のある久居戸木地区のお寺は『蓮蔵寺』である。
- 52 久居桃園地区にあるキリシタン灯籠は、帽子をかぶりマント・ズボンの旅姿で合掌している。この珍しい灯籠があるのは『引接寺』である。
- 53 榊原町の射山神社には顕彰碑や地区の歴史・文化を伝える物が多く、市指定文化財も3点ある。それは棟札、芭蕉翁反古塚と『かんこ踊り』である。
- 54 全国の神社建築には様々な様式があるが、香良洲神社は『神明造』である。
- 55 明治後期の建造物として、伝統的な外観を残し、優れた意匠や材料をよく残していると評価され、平成25年3月国登録有形文化財に登録された香良洲町の家は『濱村正太夫酒店』である。

- 56 「雲出の川瀬月澄みて 太平洋の波寄する 神風伊勢の香良洲浜 世紀の空を翔けるべく 雄叫びあぐる高らかに 我等は空の少年兵」…これは香良洲の予科練の隊歌であるが、この碑は『香良洲公園』に建っている。
- 57 浜っ子幼稚園の建設をはじめ、まちの整備、発展に多大な資財を投げ打ち旧香良洲町の名誉町民に選ばれているその人は、『高山成雄』である。
- 58 安濃町にある明合古墳は昭和24年、今の津高校の地歴部の生徒達が珍しい形をしていることを発見、その後調査して双方中方墳であることがわかり『県史跡』となった。
- 59 「和訓栞」に収録された見出し語の数は約21000語で、『いろは順』で並べられていた。
- 60 忠犬ハチ公の飼い主・上野英三郎博士は久居生まれで我が国農業土木の先駆者。墓碑がある久居のお寺は『法専寺』である。
- 61 芸濃町河内谷から流れる本流全長28.9kmの二級河川・安濃川。かつては芸濃町椋本で美濃屋川、同町萩野（はいの）で萩野川、安濃町で安濃川、旧津市では『塔世川』とよばれた。
- 62 雲出川は奈良との県境に位置する三峰山に源を発し、景勝地を経て伊勢平野を横断して伊勢湾に達する。景勝地とは家城ライン、瀬戸ヶ淵、『鶴ヶ広』である。
- 63 津市の西部中山間地域を結ぶ大動脈として市民から重宝されている中勢広域農道「グリーンロード」の起点は、『亀山市』である。
- 64 ミエゾウの基準標本は、大正7年、芸濃地区・明小学校の北、中ノ川河床で最初に発見されたもので、特別に『芸濃標本』と呼ばれている。
- 65 近年、河川環境の悪化などから数が減り、絶滅危惧種に指定されている天然記念物の淡水魚。世界でも伊勢湾、三河湾に注ぐ川にのみ棲息している。津市内を流れる雲出川水系でも発見されているこの貴重な魚は『ネコギギ』である。
- 66 志登茂川の下流域は低湿地で、かつては一身田近くまで川の水が逆流していた。この低湿地付近には南塩屋、塩屋、北塩屋などの地名が残り、塩の生産地であったと思われる。これらをまとめて呼んだ古代の地名は『中塩屋』である。
- 67 津城南側の外堀は、高虎修築時に今の中部電力から松菱まで長堤で岩田川と仕切られていた。この内側には満潮時、川から沢山の魚が入り、特に多かった魚の名前から『鯉堀』と呼ばれた。
- 68 京都遊学を終えて帰郷した土清は神道の道場「森陰社」と家塾「洞津谷川塾」を開いた。「洞津」とは『安濃津』という意味である。
- 69 新町地区の古い商店街。江戸時代、津城下と伊賀を結んだ街道筋の町で戦後、南に県道が出来たため閑静な住宅地になったのは『八町』である。
- 70 昭和8年、国策により満蒙開拓移民の教育訓練施設が全国で2か所建設された。その内の一つが河芸町千里ヶ丘西部の三重高等農林学校に併設されたが、跡地は現在『住宅団地』になっている。
- 71 大伴家持編纂の万葉集に「草陰の安努な行かむと墾りし道阿努は行かず荒草立ちぬ」と詠まれている。この「草陰の安努」が『安濃』の地名ではないかともいわれている。
- 72 倶留尊山（1037.6m）は美杉町太郎生地区と奈良県曾爾村との境界の山。年間数万人の山歩き愛好者が訪れている隠れた名所。読みは『くろそやま』という。

- 73 昭和46年、美杉町竹原地区に雲出川下流域の水害防止を主目的に総貯水量2330万m<sup>3</sup>のダムが完成した。その名称は『瑞穂の国の敬称』から取り君ヶ野ダムとした。
- 74 初瀬街道には、一志郡内で雲出川を渡るために『亀ヶ広の渡し』があった。
- 75 一志町八太地区を通る初瀬街道には、何か所も曲がり角が続いている所がある。これを『八太の八曲り』という。
- 76 江戸時代、榊原温泉は湯治場として栄え、お伊勢参りの旅人も足を休め「湯ごり」をした。鈴鹿の関から伊勢別街道を選んだ旅人の榊原への追分は『高野尾』である。
- 77 雲出川を渡るのに香良洲道にあった渡しは、『矢野の渡し』といわれていた。
- 78 香良洲町にあった予科練、三重海軍航空隊が使用していた面積は、町全体の『半分』ほどを占めていた。
- 79 伊賀街道は、参宮道や官道としてだけではなく、伊賀方面から菜種油や綿などが江戸まで運ばれたという物流の道で、津方面から伊賀へは水産物や『塩』が運ばれた。
- 80 藩政時代の伊勢木綿、津緞子（つもじ）に続き、明治・大正・昭和も津は繊維のまちだった。現在、イオン津店（旧サティ）がある場所にあった紡績工場は『近江絹糸』である。
- 81 井村屋グループは明治29年、井村和蔵が松阪市で創業した菓子店が前身。戦後の昭和22年、二代目が戦友と創立した株式会社井村屋で飛躍した。この二代目の名前は『井村二郎』である。
- 82 津は昔から酒造りが盛ん。現存する6蔵は、白山の海野酒造、香良洲の今村酒造、久居の油正、旧津の寒紅梅酒造、安濃の松島酒造、そして河芸の『小川酒造』である。
- 83 分部町にある江戸期以来の津の伝統工芸品「竹細工」の専門店。材料に全国各地から良質の竹を取り寄せ製造販売している。この店は『阿部久竹芸店』である。
- 84 芸濃町萩野地区の畑の中に長さ25mで両端が緩く傾斜しているコンクリート造りの構造物がある。昭和15年に設置された軽便鉄道の萩野駅の『建物の基礎』である。
- 85 安濃町で生産されていた江戸時代の特産織物・津緞子で作られた衣料が元無足人の家で、平成19年に新たに発見された。この衣料とは特上品の『羽織』である。
- 86 安濃町にある独立行政法人・野菜茶業研究所が研究開発し、町内にも多くひろがり、旧安濃町の町花にもなった花がある。この花とは『スプレー菊』である。
- 87 JR名松線は、名張市と松阪市とをつなぐ鉄道として、その名がついた。終点の伊勢奥津駅には山里の風景と相まって珍しい『初期信号機』がある。
- 88 近鉄榊原温泉口駅から徒歩5分のところにある彫刻美術館は、外国の某美術館が所蔵する彫刻作品から直接型を取ったレプリカ約1300点を展示している。某美術館とはパリの『ルーブル美術館』である。
- 89 榊原温泉は肌にやさしくアルカリ性単純泉と相まって万病に効くといわれているが、源泉を更に調べると酸化還元力が高く老化防止の効果から『美人の湯』と呼ばれている。
- 90 伊賀の電力王と讃えられる経済人が榊原村に力を貸し、昭和11年に榊原温泉復興祭を挙げる事ができた。その人物は『田中善助』である。

- 91 平忠盛の生誕地として伝えられる忠盛塚は、別名「胞衣（えな）塚」とも呼ばれる。胞衣とは『産着』のことである。
- 92 阿漕平治の菩提寺・上宮寺の跡と言われる橋南地区柳山津興の阿漕塚では、平治の霊を慰めるために毎年ここで『平治盆』が行われている。
- 93 約370年の歴史がある津まつりの出し物には、分部町唐人踊を筆頭に昔ながらの伝統を受け継ぐものも少なくないが、戦後始まった出し物に『玉車』がある。
- 94 一身田町にある一御田神社では毎年5月にお田植え祭りが行われる。桧の横板に「大梵天皇御田植歌」と墨書きされたお宝は『平安時代』のものである。
- 95 伊勢街道の河芸町中瀬南端の林に痔神神社があるが、現在も祭礼日に県内外からの参拝者がある。この神社のご神体は『白蛇』である。
- 96 鎌倉時代、死期を悟った僧が、磬（けい）という仏具を叩きながら墓穴に入り、経や弥陀の称号を唱えつつ往生したと伝える古僧入定塚のある河芸町北黒田の寺は『観音寺』である。
- 97 芸濃町椋本新町にある地藏堂は、この付近の人々があることを願い建立したもので、堂裏に講の田があり維持してきた。今は70軒ほどで構成する講で守られている。ここに祀られているのは『子安地藏』である。
- 98 芸濃町河内地区落合は平家の里。屋島の陣を離脱、那智の海で偽装入水後、この地に住み着いたと伝わる平清盛の孫にあたる公達は『平維盛』である。
- 99 美里町日南田地区のバス停留所前にある地藏堂は、昔からこの集落の人々にとって生活の中心的な存在であった。特に『安産』にご利益があるといわれる。
- 100 長野氏の家臣・鹿間某は猟が大好き。観音様に祈願して手に入れた犬を連れて猟をしていると、不意に恐ろしい動物に襲われたが、犬が身を挺して主人を守った。鹿間は塚を建て犬を供養したという。襲ってきたのは『熊』である。
- 101 伊勢本街道奥津宿の家々では、趣向を凝らした暖簾（のれん）が軒先にかけてある。平成13年村おこしの一環として、その家のおかみさんたちが『手作り』したものである。
- 102 美杉町上多気に二泊三日の伊勢参りから帰ってくる伊勢講の人たちを、家族や子どもたちが出迎えた場所があり、そこを『坂向場』という。
- 103 斎王は天皇崩御などの凶事の帰路、伊勢と伊賀の国境、青山峠で『境祭』を行った。
- 104 白山町に伝わる藤原千方伝説によれば、平安時代、伊勢伊賀に大きな力を持つ千方が乱を起こしたが、官軍の大將・紀友雄におびき出され騙し討ちにされたという。おびき出された場所は『瀬戸ヶ淵』である。
- 105 榊原温泉は「恋の湯治場」をキャッチフレーズとしているが、射山神社にある恋のパワースポットは『拝殿右の御神燈』である。
- 106 毎年7月15日に香良洲神社で行われる夜に参る県内でも珍しい神事。境内にはたくさん提灯が灯り、婦人会を中心に手踊りを奉納し、美しい夏の風物詩としても有名なのが、『夜がらす祭』である。
- 107 津駅東にある初馬寺は「伊勢の津七福神」霊場の一つ。ここに祀られているのは『恵比須天』である。
- 108 白山町には、川口、倭及び山田野に白山比咩神社がある。主祭神は、伊邪那岐命と伊邪那美命を仲直りさせた調和の神『菊理媛命』である。

- 109 行列ができる精肉店として知られる北丸之内の名産松阪肉「朝日屋」は、松阪肉牛共進会でチャンピオン牛を20年以上も連続獲得している。この共進会の最高賞の正式名称は『最優秀賞』である。
- 110 近年B級グルメとして話題の「津ぎょうざ」は、旧津市立小学校の給食に導入され名物献立になっていたのがヒント。定義として揚げぎょうざであることと、直径が『20cm』の大きな皮を使用する事である。
- 111 味噌かつといえば今は名古屋名物として知られているが、発祥地には諸説あり、津が発祥だとする説もある。津発祥説の店の名は『カトレア』である。
- 112 半田の金石山高西寺は精進料理で知られる。懐石精進のメニューの中の人気定番に『ナシ』を器として使った料理がある。
- 113 近年は津ぎょうざがB級グルメとして脚光を浴びるが、旧津市民のソウルフードといえば、大門の日の出屋の鯛焼き、同じく大門のはちみつ饅頭、そして本家・一身田の京林堂と羽所町さかえやの『天輪焼き』である。
- 114 津の春の浜は潮干狩り客で大賑わいする。津の浜でよくとれて、砂出しなしですぐ食べられる重宝な貝は『マテガイ』である。
- 115 一身田専修寺の参詣土産として有名な「たけやまんじゅう」は創業180年の老舗「たけや」の名物である。その表面に押しあてられた焼印は『高田山』である。
- 116 平安期の「和名抄」に「黒田郷・久呂多」と記されている歴史ある河芸町黒田地区は、腐植土を含み農耕に適した黒土の地で、ブランド農産物は『米』である。
- 117 芸濃町川原地区の竹尾茶業は無農薬・有機栽培のお茶を作り、有機JAS認定を取得。黒ニンニクの約130倍という驚異の抗酸化力を持ち、疾病予防や長寿健康効果が期待できる有機茶パウダーを『県農業研究所』と共同開発した。
- 118 美杉町多気地区の伊勢本街道沿いに、薪とカマドで昔ながらの製法で羊羹を製造・販売している店がある。屋号は『東屋』である。
- 119 榊原では昔、家を建てるのも近所の人手を借りた。柱を立てる土台石を固めるのに櫓を建て大勢で石突きをした。そのとき施主がお礼として振る舞ったのは『赤飯』だった。
- 120 榊原町の会食の風習。酒が進みご飯に切り替えてほしいとき代表が主人を呼んで「お酒はたくさんいただきました、かわったものを」と伝えると、『豆腐』が出てきた。